

上座佛教・社會・政治

石 井 米 雄

はじめに

前世紀以來、もっぱら文獻學的方法によつて發展してきた、パーリ佛教（以下「上座佛教」という）をめぐる世界の研究狀況は、一九五〇年代を境に、傳統的なインド學・佛教學とは異なつた學問的背景をもつ學者の、上座佛教研究への参入によつて、あらたな段階に入る。こうした研究動向の變化の契機のひとつは、第二次大戰後、スリランカおよび東南アジアの佛教文化圏に長期間滞在し、とりわけ農村を對象とする現地研究を行う社會科學者の數の増加である。調査のため、各地の農村に入った人類學者たちは、調査の過程において、農民生活に占める、佛教の社會的・文化的重要性に注目し、農村における佛教信仰の實態報告とならんで、實踐佛教の分析方法をめぐる議論が、さかんに行われるようになった。一九六三年、シカゴ大學において、佛教文化圏における農村調査の經驗をもつ人類學者を、一堂に會して開催された「上座佛教研究會議」(Nash 1966)は、こうした學界の新しい動向を示すものといえよう。

このような佛教の人類學的研究とほぼ平行して、戦後の國家形成の過程における、佛教と政治との關係もまた、宗教學者、政治學者

たちの關心をあつめた。とりわけ、政治權力の正統化と佛教との關係をめぐる研究には、やがて、人類學者もこれに参入するにいたる。一九七五年には、カナダ南アジア研究協會 (the Canadian Association for South Asian Studies) とアメリカ宗教學會 (the American Academy of Religion) の共催によつて、「宗教と權力の正統化」(Religion and Legitimation of Power) を共通テーマとする、ふたつのシンポジウムが開催されている。

本稿は、このような戦後の上座佛教研究にあらわれた新動向を中心に、スリランカ、および東南アジアを對象とする、佛教研究の變化の展望を目的とする。紙數の關係上、原則として、著書（一部、未公開の學位論文を含む）に限つたことをお断りしておきたい。

佛教と社會

佛教を、教理からではなく、民衆が現實に受容し、實踐している形態においてとらえようとする研究態度は、けつして新しいものではない。前世紀の中葉、タイに滞在したフランス人司教バレーゴアは、すでにその著『シャム王國誌』(Pallegoix 1864)において、佛教教理、出家組織とならんで「俗信」(superstition)の章をもうけ、民衆の信仰形態に言及している。今世紀の初頭、セイロンに渡つたイギリス人布教師コプルストン (Coppleston 1908) もまた、セイロンにおける、在家佛教徒の信仰生活を論じた。タイ佛教の研究家である英國の外交官アラバスター (Albaster 1871) は、當時、タイ民衆に深い影響を與えていた通俗佛教的宇宙論『三界經』に注目し、これを紹介している。しかし、こうした初期の研究は、當時の佛教研究の主流にながらなかつただけでなく、研究者の職業的

制約もあり、それぞれの個別研究を、理論的に深化させる契機を缺いていた。

佛教を、あるべき形においてではなく、現實の社會的存在として考察しようとする姿勢は、一九五〇年代初頭、ハーバード大學の宗教社會學者スレーター (Slater 1951) が發表した、ビルマ佛教における「ネハン」觀念の研究のなかに、すでにその萌芽を見ることが出来る。ここでは、ビルマで現實に行われている佛教が、研究の對象にすえられていた。スレーターの問題意識は、かれの影響を受けて、ビルマで佛教倫理の研究を行った、W・キング (King 1964-1965) の研究に繼承された。キングは、まず、バーリ佛典の研究から導き出される佛教と、かれが親しく觀察することのできた、ビルマ民衆の實踐する佛教との間に、大きな懸隔のある點に注目し、前者を「文獻的輸出佛教」(literary and export Buddhism) と呼んで、これを民衆の實踐する現實の佛教 (popular Theravada Buddhism) から區別して、後者を、獨自な研究對象たりうるとした (King 1964-1965)。ちなみに、〈輸出佛教〉とは、西洋近代語によって、歐米に紹介された佛教の意である。

一九六八年、リーチ (Leach 1968) が、宗教研究の對象として、practical religion と philosophical religion の區別を立てることを主張したのは、「實踐佛教」が、傳統的な文獻學とは異った獨自な方法論によって、別個に、研究されるべき對象であり、「教理佛教」とは異った方法論を要請することを、明確に指摘したものといふことができる。スレーター、キングら、宗教學者によって先鞭をつけられたビルマ現代佛教研究は、その後、ナッシュ (Nash 1965) やスパイロ (Spiro 1970) など、人類學者による、特定農村におけ

る佛教を對象とした、ミクロ・レベルでの研究が進展することによって、さらに理論的に精緻化されていった。スパイロは、イデオロギー體系としての「ビルマ佛教を」 Nibbanic Buddhism, Kammatīc Buddhism, Apotropaic Buddhism, Esoteric Buddhism とし、四つの下位體系の複合體としてとらえようとした。Nibbanic Buddhism とは、ネハンへの道をめざして修業に専念する出家教團を中核として成立するイデオロギー體系である。Kammatīc Buddhism は、民衆佛教の重要な部分を成すもので、行為者の關心は、もっぱら功德の追求におかれる。これにたいし、Apotropaic Buddhism とは、日常性におそいかかる災いから逃れるための呪術的手段を、佛教のなかに求めようとする。最後に、Esoteric Buddhism は、民衆のいまだく「千年王國論的」救済願望を中心として成立する。ビルマ佛教を材料として構成された、これらの作業概念は、ビルマ以外の上座佛教研究においても、有効な分析視點を提供している。なお、Kammatīc Buddhism の中心に位置する民衆の「業」觀念については、カイズラによる、人類學者の論文集 (Keyes 1983) が刊行されている。

一九五〇年代の後半には、スリランカにおいても、人類學者、社會學者による農村研究の成果が、現れ始めていた。社會學者ライアン (Ryan 1968) は、シンハラ人村落における佛教とヒンドゥー教の、實踐レベルにおける共存状況について、詳細な記述を行った。「佛教の純粹型」とは、所詮、哲學者の抽象の所産にすぎない」と言うライアンの問題意識は、リーチのそれに通じるものがある。民衆の宗教的關心は、ビルマと同様に、スリランカにおいても、現

世的秩序における幸福の獲得におかれており、その手段は功德行（スバイロのいわゆる *Kammatic Buddhism*）である。功德行と並んで、スリランカでは、佛教呪術もさかに行われている。呪術的手段によって、日常的な不幸から逃れようとする民衆の願望をみたすための、「ピリット」（護呪經典）の讀誦はその代表的なものである。スリランカは、他の上座佛教圏とくらべ、佛教とヒンドゥー教的要素の共存が顯著であり、この現象が、多くの研究者の関心をひいた。オーベイエセケレ（Obeyesekere 1963, 1966）は、こうした宗教複合の内部に、ひとつの階層的秩序を見出し、それによって、民衆佛教をとらえる統一的視點を見出そうとした。エヴァース（Evers 1972）は、スリランカ中部の、ランカーティラカ寺院における現地調査を通じて、「ヴィハーレー」と呼ばれる佛教寺院、および「デーヴァラーレー」と呼ばれるヒンドゥー教の神祠を中核として、周辺の村落との間に形成される、宗教的、社會的、經濟的關係をあきらかにした。最近の研究としては、コロンボとキャンディの中間にあるシンハラ人村落で、實踐佛教の定着調査を行ったサウスウォルド（Southwold 1983）の研究がある。人類學者、ないし社會學者による、このような農村レベルでの佛教研究の進展に刺激されて、パリー學者ゴンブリッチ（Gombrich 1971）は、自ら現地に赴き、宗教的變化に關する人類學的調査を行った。

農村レベルの、上座佛教の實態研究の歴史は、ある意味で、タイがもっとも古い。コーネル大學のシャープ教授の指導によって、一九四八年に開始された、バンコク近郊農村調査プロジェクト（Cornell Thailand Project）は、戦後のアジアにおける農村研究の先驅的役割を果たしたが、佛教についても、いくつかの研究成果

を生み出している。そのひとつ、カウフマンのモノグラフ『バーンタット村』（Kaufman 1960）は、全編のなかば以上が、村落生活における寺院の機能の分析にあてられている。また、キングスヒルは、同様の村落佛教の研究を、北タイのクーデーン村において行った（Kingshill 1960）。

タイ佛教のみならず、實踐宗教としての上座佛教研究の理論的水準を、一舉に高めたとして評價される業績に、英國の社會人類學者タンバイアの東北タイ農村の信仰形態の研究（Tambliah 1970）がある。これは、東北の一小村におけるタイ・ラオ農民の宗教生活を佛教儀禮、「クワン」（魂）儀禮、守護靈儀禮、惡靈調伏儀禮という四個の儀禮複合として、統一的に理解しようとする試みで、その後の佛教研究に、少なからぬ影響を与えている。なお、佛教儀禮については、このほか、オランダのターウィール（Terwiel 1975）による中部タイ農村での實態調査にもとづく研究があり、ラオスについてはザゴ（Zago 1972）の研究がある。

こうした農村の佛教研究に對し、地方都市における佛教教團の役割を考察したものに、ブンナーク（Bunnag 1973）の研究がある。これは中部タイの古都、フエタヤの寺院でのフィールド・ワークに基づく研究で、小都市における寺院と地域住民との關係が分析されている。大都市における佛教の研究はまだ多くないが、タンバイア（Tambliah 1984）は、最近、バンコクという巨大都市を中心に、「聖人信仰」、護符など、これまで看過されていた對象に焦點をあわせた研究を發表した。なおタイにおける「聖人信仰」（*Chiva ba=uang pho*）については、フランスのバルチュ（Pelletier 1977）による、全國的な聖人列傳の研究がある。ベルチエの研究は、英米系

の人類學者による、フィールド調査中心の佛教人類學的研究とはややおもむきを異にし、文獻研究と聴き取り調査による研究である。

同じく極東學院系のフランス人學者ガボード (Gabaude 1979) は、タイおよびラオスの農村部における「砂佛塔」供養の慣習の文獻研究を發表している。この研究のなかで、ガボードは、「砂佛塔」供養の際用いられるテキストとその内容を、初めてあきらかにした。このほかフランス人學者による、カンボジャにおける民衆佛教の研究として、ジトー (Giteau 1969) の「結界」儀禮の研究、ビゾーのクメール諸經典の研究 (Bizot 1976) などがある。セデスはアルシャンボーとともに、タイ語の民衆佛教聖典『トライブーム (三界經)』の全譯を發表した (Coedes & Archambault 1973)。この聖典はレイノルズ (Reynolds 1982) の業績とともに、前近代におけるタイの民衆佛教研究の基礎的資料である。

以上述べてきたように、現代上座佛教の研究は、もっぱら歐米系學者の手によって進められてきたが、最近、前田惠學博士とその國際的研究チームの現地調査にもとづく、スリランカ現代佛教の研究 (Maeda 1986) が出版されたのは、わが國の現代佛教研究にとって特筆すべきことであろう。この共同研究においては、日本およびスリランカの九名の研究者が、教學、教團組織、教團史、儀禮、村落生活との關係、民間信仰との關係、佛教と近代化、佛教と政治、佛教と地域開發などを柱に、現代スリランカ佛教の總合的把握を試みている。

佛教と政治

佛教と政治の問題を、もっとも包括的に論じた業績として最初に

とりあげなければならないのは、ベッヒェルトの大冊『上座佛教諸國における佛教、國家ならびに社會』全三卷 (Bechert 1966-73) であろう。本書は、總論およびセイロン佛教を論じた第一卷、ビルマ、カンボジャ、ラオス、タイ佛教を論じた第二卷、および、長短あわせて一九九三編にのぼる上座佛教に關する論考を收録した注釋つき文獻目録、統計資料ならびに索引よりなる第三卷によって構成される膨大な研究である。それぞれの國について、社會的・歴史的背景、サンガの組織と現状、サンガと政治、イデオロギーと文化政策などを中心に問題が整理され、廣範な文獻を駆使した論述によって基本的重要性をもつ文獻であり、その後の研究の基礎となるべき業績であるが、ドイツ語で書かれたためか、英米系の研究者にはほとんど利用されていないのは残念である。

上座佛教と政治の問題が、最初に學者の關心を引いたのは、戦後の獨立の過程において宗教問題が、政治の重要課題のひとつとなったビルマとスリランカである。そのいずれにおいても、世俗國家が佛教國家かをめぐる政治化したのが、特にスリランカでは、佛教が政治的指導者の暗殺事件をひき起こすほど重要な政治的役割を演じた。

D・スミスは、まずビルマの事例をとりあげ、「世俗國家」を「佛教國家」へと變容させようとしたウ・ヌの政治的實驗が、失敗にいたった経緯を論じた (Smith 1966)。またバドニスは、スリランカの現代政治史における佛教サンガの役割について、政治學的な分析を行った (Phadnis 1976)。ビルマにおけるもうひとつの問題は、社會主義社會の建設という、ビルマの指導者がかかげた政治目標と、ビルマ人の傳統的價值意識を支えてきた佛教を、いかに調和させるかという問題である。サーキシアンス (Sarkisyanz 1965) は、

ビルマ社會主義革命達成の過程において、多くのマルクス主義的用語が、佛教的文脈で再解釋されることによって、初めて民衆に受容されたこと、そしてその結果、Buddhist-Marxist syncretism とでも呼ぶべき現象が発生した事實を提示した。なお、社會主義と佛教との共存による、佛教の變容については、ラオスの事例の報告が、オーストラリアとフランスの研究者によって行われていることを指摘しておきたい (Gunn 1982, Lafont 1982)。

以上の研究のおおくは、現代政治史における佛教の役割を論じたものであって、理論よりもむしろ事實の提示とその分析に力點をおく傾向が強い。これにたいして、政治權力の正統性と佛教との關係を、いかに理論化するかをめぐる諸問題が、政治學者のみならず、人類學者、歴史學者など、多様な専門分野の研究者の關心をあつめている。石井 (Ishii 1975, 1986) は、タイ佛教史を資料として、佛教教團の社會的・政治的機能を分析した。さきに取り上げたアメリカの人類學者タンバイアは、東北タイの宗教儀禮研究につづく、かれの第二著 (Taubiah 1976) において、タイにおける、佛教と政治組織との關係についての理論的考察を行っている。なお佛教を正面から論じたものではないが、ビルマの傳統的國家における國王權力と佛教との關係を論じた歴史學者の業績として、アウン・トゥイン (Aung-Thwin 1985) をあげておきたい。

政治權力と佛教の關係については、冒頭で觸れたふたつのシンポジウムの成果が、B・スミスを編集者として、三冊の論文集にまとめられている。三冊のうち二冊が上座部を、のこりの一冊は、インド大陸の諸宗教を主題としている。前者のうちの二冊 (Smith 1978-a) には、スリランカ佛教と政治に関する一二編の論文が収録

されている。とり上げられた時代は、古代から現代までを含み、パリー語の史書『マハーヴァンサ』の政治思想から、バンダラナイケ首相の政治思想における佛教にまでおよんでいる。もう一冊の (Smith 1978-b) は、タイ(一〇編)、ラオス(二編)、ビルマ(三編)および理論(一編)で、全體は二部に分けられ、第一部「正統化の力學」では、サンガと王權と政治組織の問題が、また第二部の「正統化の諸類型」では、儀禮、シンボルイズムの問題が、それぞれ論じられている。

一九六三年、「サンガ統治法」が改正され、開發政策の進展にもなつて、これにたいするサンガの協力がもとめられるにしたがい、タイにおける佛教サンガと政治とのかわりが、正負の両面から論じられるようになった。まず、僧侶が傳統的にもつ社會的威信を、開發政策の遂行に動員しようとするタイ政府の方針が、人類學者、社會學者によって批判的に検討された。そのひとつは、『タイにおける國家開發と佛教』と題するマルダーの論考 (Moulder 1969/1973) で、ここでは、僧侶の威信を利用して、國の開發政策の浸透をはかるうとした政府の政策は、僧侶の威信についての、過大な評價によるものであるとしている。いずれにせよ、もともと超俗性を重要な資質とする上座佛教の僧を、開發計畫の最前線に動員した新政策は、民衆の傳統的佛僧觀に、すくなくからぬ影響を及ぼした。

ソンブーン (Sonboon 1977) は、このように、政治によって動員された佛教を「政治的佛教」と名付け、開發計畫への僧侶の参加を題材に、サンガと國家の關係についての理論的考察を行っている。開發計畫に協力するために立案されたサンガ側の計畫には、「タンマチャーリック(法の巡行)」「タンマトゥート(法の使節)」「タンマ

パッターナ(法による開發)などがあるが、このうち「タンマトゥート」の内容とその分析については、人類學者ハーモン(Hammon 1978)の研究がある。

タイ國では、一九七三年に獨裁政治に反對した學生の反對運動の成功を契機として、いわゆる「民主化の時代」が到來した。しかし、一九七五年のベトナム戦争におけるベトナムの勝利、インドシナ各國における社會主義政權の誕生を背景として、一九七六年、「反革命」が発生し、タイの政治は極端に右傾化した。こうした政治過程のなかにあつて、右翼のイデオログとなつた僧侶が登場するなど、佛教は一部で、急激に政治色を強めた。ソンブーンの第二著(Sonboun 1983)は、こうした政治情勢の變化に對應して起された「タイ・サンガの政治的活動」に政治學的分析を加えた勞作である。

上座佛教團には、古くから、「千年王國論的運動」發生の可能性が、潜在的に存在していた。右にのべたような、一九七三年以降のタイのあらたな政治情勢の展開のなかで、傳統社會において發生した反體制運動への關心が、にわかに高まつた。ボンベン、アッチャラーボン(Phonphen & Atcharaphon 1984)らは、「タイにおけるミクロ信仰とヘビーブーンの反亂」と題する論文集を編纂して、歴史上、タイで發生した、佛教的千年王國論的反體制運動に關する諸論文をタイ語に翻譯刊行した。

このような文脈において見逃すことができないのは、スクロバネークの行つた「タイにおける「佛教政治(Buddhistische Politik)」(Skrobanek 1976)に關する研究である。スクロバネークは、佛教に見られるユートピア思想のなかに、體制變革のイデオロギーが内

包されている點に注目しながらも、植民地支配を經過しなかつたタイにあつては、佛教は、いぜんとして、王權を中心とする體制的擁護機能を果たし續けていると指摘した。本研究は、「とくに異端的メシアニズムを中心に」という副題がついており、佛教の枠組内部で組織された千年王國論的運動の事例を、ビーブンから、近年の「ミクロ黨」と呼ばれる政黨のように、これまでほとんど無視されていた事例にいたるまで詳細に分析して貴重である。

これまで、上座佛教の歴史は、『マハーヴァンサ』『ディーバヴァンサ』『チューラヴァンサ』や注釋書など、主として、パーリ語文獻を史料として書かれることが多かった。(たとえば(Adikaram 1946)や(Ratula 1956)など)最近の傾向として、スリランカ以外のパーリ語佛教史料の研究、翻譯が出版され始めたことが注目される。たとえばタイの研究者と共同で行なわれ、從來の研究の缺をおぎなつたジャヤヴィクラマの『ジナカーラマリー』の翻譯(Jyawickrama 1968)や、生野善應の『サーサナヴァンサ』の研究・翻譯(Ikuno 1980)などの業績がそれで、いずれも、今後の佛教史研究の基礎資料となるべきものである。

こうした傳統的佛教史料に、碑文その他の東南アジア諸語史料を加えて行われた、批判的佛教史研究の出現を、戦後の新たな研究動向として指摘しておく必要がある。ライのビルマ佛教史(Ray 1946)は、著者が戦前に發表したビルマの「サンスクリット佛教」の研究とともに、今後の研究の出発點となるべき業績である。タン・トゥンが、同時代の碑文史料を縦横に驅使して行つたバガン佛教の研究(Than Tun 1978)は、もっぱら、後代のビルマ語史料

に基いて書かれたこれまでのバガン佛教史に、鋭い批判を加えたものとして注目される。また王朝時代から植民地期を経て、戦後の獨立以後の佛教サンガと國家との關係を論じたすぐれた社會學的研究として、メンデルソンの研究をファーガスンが編集して出版した研究書 (Mendelson 1975) も重要である。

スリランカ佛教については、パーリ語、シンハラ語の豊富な文獻を利用して、中世初期スリランカの佛教寺院と農村經濟の關係を解明したタナワルダナの研究が、今後の佛教サンガの社會經濟史的研究に、ひとつのモデルを提供としたものとして、高く評價される。ところで、『チュウラヴァンサ』のみを史料としては、けつしてうかがうことのできない近世スリランカの佛教史が、オクスフォード大出身のシンハラ人社會學者マラルゴーダによって書かれている (Malagoda 1976)。同書は、一七五〇年から一九〇〇年の一五〇年間を對象とし、オランダ領時代、英國領時代に衰微した佛教の復興と、佛教の變容を論じたもので、シンハラ語、パーリ語、サンスクリット語文獻に加えて、各地の文書館所蔵の植民地文書をも渉獵した本格的歴史研究である。

タイ佛教についての歴史的研究は、近年、一九世紀を中心に、ようやく本格化しつつあるが、レイノルズの一九世紀タイ・サンガの研究 (Reynolds 1973) は、文書館史料を使った初めての佛教史研究として注目される。

なお、現代における佛教の政治的・社會的意義については、H・ドモニンらの編集になる論文集 (Dumoulin 1970, Dumoulin & Maraldo 1976) がある。同書は、すべての現代佛教を包括的にとりあつたもので、上座佛教については、スリランカ、ビルマ、

タイ、ラオス、カンボジャをあつちがつているが、英語版では、最近のインドネシアにおける上座佛教の動きにも觸れており、得るところが多い。

おわりに

以上、戦後の上座佛教研究史の側面を、概観してきたが、一言にしていえば、これらの研究は、いずれも佛教教理それ自體ではなく、佛教という宗教が、それを受容した各國の歴史のなかにいて、社會や政治と、とり結ぶ關係の解明におかれている。佛教のこうした側面は、これまで、傳統的な佛教學者の關心の外におかれることが多かった。戦後にあらわれた、このような新しい佛教研究が、佛教學者ベヒェルトやゴンブリッチといった一部の例外を別にすれば、もっぱら、人類學者、社會學者、政治學者の手によって行われてきたというのも、自然の流れであつたということができよう。しかし、いかに民衆佛教とはいえ、それは、教理佛教 (リーチのいわゆる philosophical religion) とまったく無縁の存在ではありえない。スパイロは、ビルマ佛教を、パーリ佛教という「大傳統」の Burmese Visistude としてとらえているが、スレーター以來の「ふたつの佛教」は、兩者をいかに關係づけるかの問として、現代佛教を研究する者に、つねに理論的反省を要求しつづけているように思われる。

引用文獻

Adikaram 1946, *Early history of Buddhism in Ceylon*, Colombo.

- Alabaster, Henry 1871, *The wheel of the law: Buddhism illustrated from Siamese sources*. London.
- Aung Thwin, Michael 1985, *Pagan, the origin of modern Burma*. Honolulu.
- Bechert, Heinze 1966—73, *Buddhismus, Staat und Gesellschaft in den Ländern des Theravada Buddhismus* 3 Bde. Frankfurt am Main.
- Bizot, François 1976, *Le figuier a cinq branches: recherche sur le bouddhisme khmer*. Paris.
- Bunnag, Jane 1973, *Buddhist monk, Buddhist layman: A study of urban monastic organization in central Thailand*. Cambridge.
- Coedes, G. & Archaimbault, Ch. 1973, *Les trois mondes (Traibhumi Brah Rvan)* [Pub. EFEO] Paris.
- Copleston, Reginald S. 1908, *Buddhism primitive and present in Magadha and in Ceylon*. London.
- Dumoulin, Heinrich 1970, *Buddhismus der Gegenwart*. Freiburg.
- Dumoulin, Heinrich & Mariado, John C. 1976, *Buddhism in the modern world*. New York.
- Evers, Hans-Dieter 1972, *Monks, priests and peasants: A study of Buddhism and social structure in central Ceylon*. Leiden.
- Gabaude, Louis 1979, *Les cettia de sable au Laos et en Thaïlande*. [Pub. EFEO] Paris.
- Giteau, Madeleine 1969, *Le bornage rituel des temples bouddhiques au Cambodge*. [Pub. EFEO] Paris.
- Gombrieh, Richard F. 1971, *Precept and practice: Traditional Buddhism in the rural highlands of Ceylon*. Oxford.
- Gunawardana, R. A. L. H. 1979, *Robe and plough: Monasticism and economic interest in early medieval Sri Lanka*.
- Gunn, G. F. 1982, "Theravadians and commissars: the state and national identity in Laos", in M. Stuart-Fox, *Contemporary Laos*, St. Lucia.
- Harmon, R. E. 1978, "Buddhism and action: the Thammathut ("Ambassador of dharma") program in Thailand" (Ph. D. dissertation, Univ. of Washington).
- Ikuno Zenko 生駒善麿 一九七五 『ユネン佛教一六〇の實際と變遷』 東京
- Ikuno Zenko 生駒善麿 一九八〇 『ユネンと王國佛教の成長』 東京
- Ishii Yoneo 石井米雄 一九七五 『王國佛教の政治社會學—圖表の變遷』 東京 English translation: 1986, *Sangha state and society: Buddhism in Thai history*. Honolulu.
- Jayawickrama, N. A. 1968, *The sheaf of earlands of the epochs of the conqueror being a translation of Jinakāma-lpakaranaṃ of Ratanaṇḍa Thera of Thailand*. London.
- Kaufman, H. K. 1960, *Bangkhud, a community study in Thailand*. Locust Valley.
- Keyes, Ch. 1983, *Karma, an anthropological inquiry*.

- Berkeley.
- King, Winston L. 1964-a, *A thousand lives away, Buddhism in contemporary Burma*. Oxford.
- do—, 1964-b, *In the hope of nibbana: An essay on Theravada Buddhist ethics*. LaSalle.
- Kingshill, Konrad 1960, *Kudaeng—the red tomb, a village study in northern Thailand*. Chiangmai.
- Lafont, P. B. 1982, "Buddhism in contemporary Laos", in M. Stuart-Fox, *Contemporary Laos*. St. Lucia.
- Leach, E.R. 1968, *Dialectic in practical religion*. Cambridge.
- Maeda Egaku 前田巖麿 (譯著) 一九八六 『ベリランカの上座部教』 集英
- Malalgoda, Kisiiri 1976, *Buddhism in Sinhalee society, 1750—1900: A study of religious revival and change*. Berkeley.
- Mendelson, E. M. 1975, *Sangha and State in Burma*. Ithaca.
- Mulder, Niels 1969, *Monks, merit, and motivation: Buddhism and national development in Thailand*. Wyoming (second revised edition. 1973)
- Nash, Manning 1965, *The golden road to modernity: Village life in contemporary Burma*. New York.
- do—, (ed.) 1966, *Anthropological studies in Theravada Buddhism*. Ann Arbor.
- Obersekere, Gananath 1963, "The great tradition and the little tradition in the perspective of Sinhalese Buddhism", *Journal of Asian Studies* 22 (2).
- do—, 1966 "The Buddhist pantheon in Ceylon and its extensions", in Nash (1966).
- Pallegoix, J. B. 1854, *Description du royaume Thai ou Siam*. 2 vols. Paris.
- Peltier, Anatole-Roger 1977, *Introduction a la connaissance des hlen ba de Thailande*. [Pub. EFEO] Paris.
- Phadnis, Umita 1976, *Religion and politics in Sri Lanka*. London.
- Phonphen Hantrakul & Atcharaphon Kamutphisamai 1984, *Khwamchua sian lae kabot phumipun nai sangkhom thai* ("พุทธศักราช ๒๕๒๗-๒๕๒๘) Bangkok.
- Rahula W. 1956, *History of Buddhism in Ceylon*. Colombo.
- Ray, Nihar-Ranjan 1946, *An Introduction to the Study of Theravada Buddhism in Burma*. Calcutta.
- Reynolds, Craig 1973, "The Buddhist monkhood in nineteenth century Thailand" (Ph. D. dissertation Cornell University).
- Reynolds, Frank & Mani B. Reynolds 1982, *Three worlds according to King Ruang: A Thai Buddhist cosmology*. Berkeley.
- Ryan, Bryce 1958, *Sinhalese village*. Coral Gables, Florida.
- Sarkisyan, Emanuel 1965, *Buddhist backgrounds of the Burmese revolution*. The Hague.
- Skrabanek, Walter 1976, *Buddhistische Politik in Thailand mit besondere Berücksichtigung des heterodoxen Messia-*

nismus, Wiesbaden.

Slater, Robert 1951, *Paradox and nirvana*. Chicago.

Smith, Bardwell L. 1978-a, *Religion and legitimization of power in Thailand, Laos, and Burma*. Chambersburg.

—do—, 1978-b, *Religion and legitimization of power in Sri Lanka*. Chambersburg.

Smith, Donald E. 1965, *Religion and politics in Burma*. Princeton.

—do—, 1966, *South Asian politics and religion*. Princeton.

Sompoon Suksamran 1977, *Political Buddhism in Southeast Asia: The role of the sangha in the modernization of Thailand*. London.

—do—, 1982, *Buddhism and politics in Thailand*. Singapore.

Southwold, Martin 1983, *Buddhism in life, the anthropological study of religion and the Sinhalese practice of Buddhism*. Manchester.

Spiro, Melford E. 1967, *Burmese supernaturalism: A study of the explanation and reduction of suffering*. Englewood

Cliffs.

—do—, 1970, *Buddhism and society: A great tradition and its Burmese vicissitude*. New York.

Tambiah, S. J. 1970, *Buddhism and the spirit cults in North-East Thailand*. Cambridge.

—do—, 1976, *World conqueror and world renouncer: A study of Buddhism and polity in Thailand against a historical background*. Cambridge.

—do—, 1984, *The Buddhist saints of the forest and the cult of amulets: A study in charisma, hagiography, sectarianism, and millennial Buddhism*. Cambridge.

Terwiel, B. J. 1975, *Monks and magic: An analysis of religious ceremonies in central Thailand*. London.

Than Tun 1978, "History of Buddhism in Burma A. D. 1000 —1300", *Journal of The Burma Research Society* 61 (1 & 2).

Zago, Marcel 1972, *Rites et ceremonie en milieu buddhiste lao*. Roma.